

労苦・努力から未来へ

Hard Work, Efforts, and Prosperous Future

学長 武田 雅俊

2020年4月から学長職を勤めているが、本年度は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により社会活動が大きく制限されるという事態となった。本学のCOVID-19下での対応と活動については本誌の別稿に記述したので、ご参照いただきたい。本稿では、新型コロナも含めて色々な意味で大変な時期に学長職を引き継ぐことになっての決意と、本学の将来像について記載しておきたい。

小生は2018年4月に認知予備力研究センター長として本学に赴任した。自分の役目は学術研究の活性化にあると理解して本学教員の研究支援に力を入れてきた。認知予備力研究センター（Cognitive Reserve Research Center; CRRC）を設置し、CRRCの名前で隔月にセミナーを開催し2021年1月には18回を数えた。毎回のプログラムは学内研究発表、論文紹介、学外者による研究発表という構成であり、小生は論文紹介を担当して毎回30人ほどの参加者と共に新しい知見を共有してきた。CRRCセミナーの記録も兼ねて毎月CRRC便りを刊行し、セミナーの無い月には話題の研究トピックス記事を紹介してきたが、2021年1月で34号を数えた。2019年には本学で最初となる寄附講座が設置され、和歌山県立医科大学の宇都宮洋才先生を客員教授としてお迎えして寄附講座「紀州ほそ川創薬機能性食品学」講座がスタートした。このような研究活性化は多くの若い世代の教員に支持され、本学からの文部科研費の採択数/申請数も順調に伸びてきた。本学教員を代表とする各年度の採択数/申請数は、2018年に1/6、2019年に3/9、2020年3/13となり、本年度は代表分担を含めて合計11本の文部科研費による研究が行われている。そして、2020年12月に英文雑誌「Cognition & Rehabilitation」を刊行した。創刊号には、和歌山県立医科大学リハビリテーション医学講座の田島文博教授と本学理事長河崎建人先生からの祝辞と共に、学内外からの学術論文15本を掲載した充実した内容の学術誌を上程することができた。このような地道な研究活動とその研究成果の発表を継続していくことは、大学にとって基本的に重要なことと思っている。質の良い大学とは、優れた研究成果を発信して社会に還元できる教育機関のことである。

本学では、そのような方向性を一層推進するために大学院を設置することになった。2019年4月からの大学院設置検討委員会を経て、大学院設置準備委員会が毎月開催されており、2022年4月の認知リハビリテーション学専攻修士課程大学院の開設を目指して準備が進められている。また、同時に本館北側に新学舎の建築計画がスタートした。

本学は河崎医療技術専門学校（1997（平成9）年開設）を母体として、2006（平成18）年4月に開学したわが国初のリハビリテーションの名称を冠した単科大学である。これまで多くの理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を育成してきたが、2020年4月に受け入れた第15期生の入学者数は大幅に減少した。これは和歌山市など近隣地区にリハビリテーション系大学が新設されたことも影響したであろうが、このまま学生の減少が続くと本学の存続自体も危うくなるとの危機感が高まった。

本学は、これまで時流におもねることなく、いたずらに低きに流れることなく、確固とした理念のもとに運営されてきたと思う。しかしながら教学関係者の間では2018年問題として取りざたされてきた18歳年齢者が大きく減少するという事態に十分には対応できていなかったのかもしれない。本年度のような入学者減の状態では本学の存続はあり得ず、良質な入学者を確保して新たな大学として再出発する覚悟で事態に望む必要がある。そのために教職員の労苦と汗水を覚悟しなければこの危機は乗り越えることはできないであろう。このような状況に対処するために、本年度から入試委員会と広報委員会の編成を大きく変えて、よりダイナミックな入試広報体制に変更した。また、アドミッションオフィスを設置して、学生の動向を踏まえて迅速に対応できる入試広報体制を整えた。入試制度を大きく変更すると共に、ファミリー奨学金制度、指定校奨学金制度が始まった。また、大学生や社会人を対象とした編入制度も整備された。このような試みにより、良質な入学者を確保したいと思っている。

本年のコロナ危機は大学のかじ取りにも大きな影響を与えたが、別稿に報告したように、これまでのところ、小規模校としての強みを生かした迅速な判断と適切な対応により、感染拡大予防と学生の教学環境の保持という両方の目的をなんとか果たしているように思う。短期的な対応策と中長期的な理念とを組み合わせることでこの未曾有の危機を乗り越えていきたい。

本稿を記述するにあたり本誌の創刊号を読み返してみたが、上好昭孝学長による開学への決意と共に、河崎茂前理事長、河崎建人副理事長（当時）の心意気が記載されている。河崎茂前理事長には何度かお目にかかったことがあるが、日本精神科病院協会会長を勤められた大先輩であり、人間的にも心から敬意を抱いている方である。河崎茂前理事長の思いは、リハビリテーション専門職と精神科医療との協働であったろう。河崎茂前理事長には、近い将来には精神科病棟も高齢者が多くなり、精神科病棟には作業療法士だけでなく、理学療法士と言語聴覚士の関与が必要となるという先見の明があった。実際にわが国は程なくして超高齢社会となり、リハビリテーション専門職の重要性が高まっている。そして、河崎茂前理事長は大学の卒業生が出る年次に合わせて大学院の設置を計画しておられた。

学長職をお引き受けするにあたり、微力ながら自分のこれまでの経験を踏まえて本学の発展のために力を尽くそうと決意した。そして、本学の中長期的な将来像を自分なりに考えた結果、財政的には困難な状況にあることは百も承知であったが、本学は大学院を設置して創設者の理念を実現すべきである時であることを確信した。河崎建人理事長は、財政的な事情からいったんは先延ばしにしておられた大学院設置という懸案の実現に努力することを決断された。

そして2020年3月には理事長のリーダーシップのもとに全教職員による3日間に及ぶ話し合いの機会が持たれ、本学の再出発の意味合いを込めて「寄り添うところ、支える技術。」とのタグラインを決定した。理事長以下全教職員が心をつなげて新たなタグラインのもとに力を合わせて本学の発展を目指していこうとの決意の表明であり、2020年は本学全教職員の団結が高まっているように思う。学長を含めて全教職員の力を合わせて労苦をいとわずに、本学の輝かしい未来を目指して努力を積み重ねていこうと思っている。